東京学芸大学・先端教育人材育成推進機構・外国人児童生徒教育推進ユニット 2025
オンライン研修「多様性が活きることばの教育 2025」 報告

趣旨

子どもたちの多様性が生きることばの教育をテーマに、2 種類の研修を行う。文化間移動をした子どもたちが、その多様性や出身国・地域等での経験を活かし、学級・学校・地域社会の一員としてその力を発揮できることばの教育を受講者とともに構想する。新たな視点とアイディアで、学びの場・内容と活動、そして支援のあり方を議論し、かれらをエンパワーメントすることばの教育を具体的に検討する。

研修 A では、高等学校における日本語学習支援に関して環境づくりという視点から捉え直して学ぶ。研修 B では、子どもたちが成長・発達を十全に送るための教育のシステムを考えるために、幼・小・中・高での学習の連続性を意識したことばの教育について検討する。両研修とも、テーマに関連する情報の提供（講義）・現場の取り組み実践例・参加者間の交流／ワークショップで構成する。

Ⅰ　研修 A「多様な言語的文化的背景をもつ高校生のための学習環境づくり」

＜ねらい＞

高等学校において「特別の教育課程」による日本語指導の制度化が施行されて 3 年目を迎えた。外国人生徒等が、共生社会の一員として自己を実現するためにも、この制度を利用して日本語指導の充実を図りつつ、その学習を教科学習、キャリア形成、社会的活動への参加等に関連付けて、自己を開拓するための力を育むことが期待される。

研修 A では、多様な言語的文化的背景をもつ生徒たちが自分の未来を切り開き、社会参画するためのことばの教育・支援を検討する。それには生徒自身が、自分がもつ潜在的な力に気づき、さらにその力を能力として開拓できる、つまりかれらをエンパワーメントすることが重要である。本研修では「日本語指導」を、外国人生徒等が、その多様性を活かして主体的に参加し、新たな価値を創造する「ことばの学習」のための「学習環境のデザイン」という視点で捉えなおす。学習環境を、「活動」「人工物（教材・教具等のリソース）」「コミュニティ（共同体）」の 3 つの側面からいかにデザインするか、事例や現場の取り組みをもとに具体的に学ぶ。

1　研修 A 報告

(1) 第 1 回研修　概要

日時	2025 年 6 月 8 日（日）10：00 - 12：30
主たる受講者（対象）	高校で学ぶ外国人生徒等、および高校生相当年齢の子どもに日本語指導・学習支援等の支援を実施している教師・支援者等
テーマ	学習環境としての活動のデザイン
ねらいとする資質・能力※	＜捉える力＞ エ　認知面の力と教科などの学力を年齢的な発達や学習経験を考慮して捉えることができる。 ク　子どもがどのよう自己像を描き、どのように社会参加し自己実現ができるかを、社会の変化とともに展望することができる。 ＜育む力＞

	セ　学校内外の生活・学習に結び付けて、日本語や教科の指導・支援、内容と日本語を統合した指導・支援をすることができる。 ＜変える力＞ ヒ　子どもが自身の多様性を支援にして活躍できる教育を実施し、多文化共生を促すことができる。
研修内容	１　学習環境デザインの考え方で、「日本語指導」の活動を取り上げて検討する。生徒の興味・関心に基づき、母語・母文化、これまでの経験、思考・判断する力を活かして、ことばの力を耕し育む活動について具体的な事例をもとに考える。 ２　「特別の教育課程」による日本語指導を実施している東京都立青梅総合高等学校が、具体的な指導体制や指導内容について報告する。
事前学習課題（参加に当たって）	東京学芸大学先端教育人材育成推進機構外国人児童生徒教育推進ユニット（2024）『高等学校におけるに日本語指導の制度化　「特別の教育課程」としての編成・実施について』 ＜１＞基本的な考え方と制度の解説 ＜２＞「特別の教育課程」として日本語指導の編成・実施のポイント ＜３＞高等学校における日本語指導の現状と課題

※文部科学省　「外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修モデルプログラム開発事業」の「豆の木モデル」（日本語教育学会 2019）にもとづく

（2）研修 A 第 1 回　実施計画

活動展開	具体的な内容・活動	利用した資料等
①説明「研修テーマ、趣旨、目標」	・本研修の趣旨 ・ねらいとする資質・能力 ・研修終了後の振り返りの実施	・研修趣旨のスライド資料 参考文献：山内（2020）
②講義「学習をデザインする」	・学習環境 ・デザイン活動とは ・デザイン思考	参考文献：ハーバード・サイモン（1999）／ティム・ブラウン（2019）
③講義「学習」環境としての活動	・創造的経験的学習（ワークショップ） ・タスクベースの言語指導	参考文献：山内（2020）／松村（2017）
④講義「日本語指導・学習支援例」	・総合的な学習の時間「金融リテラシー」 ・学校設定科目：日本語「折れ線グラフから読み取ろう」 ・学校設定科目：日本語「受け身」 ・特別の教育課程：日本語指導「質の高い教育をみんなに」	参考文献： ・本ユニット 2023 年度研修報告書 ・本ユニット（2023）「高等学校の日本語指導・学習支援のためのガイドライン」 ・本ユニット（2024）「高等学校における日本語プログラム」
③事例報告	報告：「特別の教育課程」による日本語指導実施校の取り組み 東京都立青梅総合高等学校	講師作成スライド

	教諭　永田明久氏 質疑応答： 口頭で・チャットへ書き込みで	
④グループワーク 「生徒の経験や力を活かす活動」	小グループで話し合い ・自己紹介 ・生徒のもつ力や経験を活かすための学習活動のアイディア	グループ活動の課題 **話し合い:生徒の経験や力を活かす活動** ご自身が行っている日本語の授業や学習支援で、生徒が知っていること(学んだ知識や経験したこと)や好きなこと・できること(趣味・運動、アート、その他何でも)を活かして行っている活動を紹介してください。できるだけ、生徒自身が決定し、探究し、創造する活動に。また、協働で課題を達成したり、対話によって多様なアイディアに触れて考えを広め、深められるような活動を。 実際には行ったことはないけれども、こんなアイディアがあるという紹介でも構いません。 ☑生徒のどんな知識・経験・強みを生かして ☑どんな語彙・表現を使いながら ☑どんな活動をするか
⑤振り返り	アンケート記入 ・満足度 ・今後の活用のアイディア ・資質・能力の向上の有無	

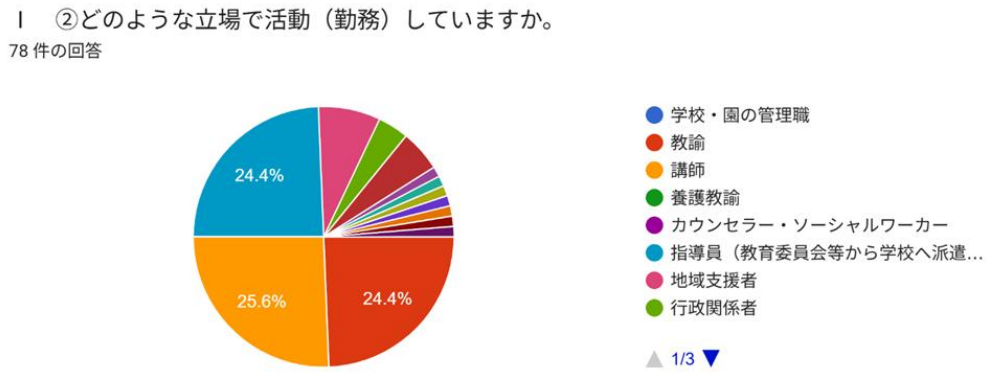
参考文献・資料
・山内祐平（2020）『学習環境のイノベーション』ミネルヴァ書房
・ハーバード・サイモン（1999）『システムの科学』パーソナルメディア
・ティム・ブラウン（2019）『デザイン思考が正解を変える』早川書房
・松村昌紀（2017）『タスク・ベースの英語指導』大修館
・本ユニット 2023 年度研修報告書
：https://kodomonihongo.u-gakugei.ac.jp/.assets/M23_kenshu04_ogikubo2.pdf
・本ユニット（2023）「高等学校の日本語指導・学習支援のためのガイドライン」
：https://kodomonihongo.u-gakugei.ac.jp/.assets/M22_koko_nihongo_guideline.pdf
・本ユニット（2024）「高等学校における日本語プログラム」
：https://kodomonihongo.u-gakugei.ac.jp/project02/content3.html

3　成果

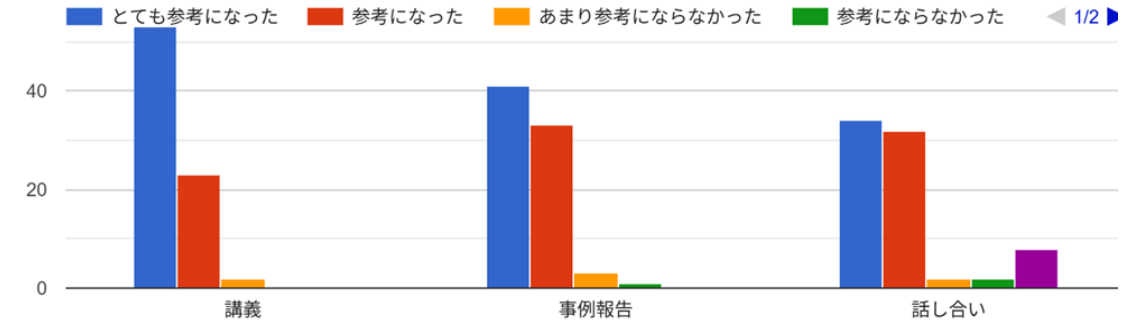
参加申し込み数：156　当日参加者数：121　アンケート協力者数：78（回収率 63.9%）

＜アンケートより＞

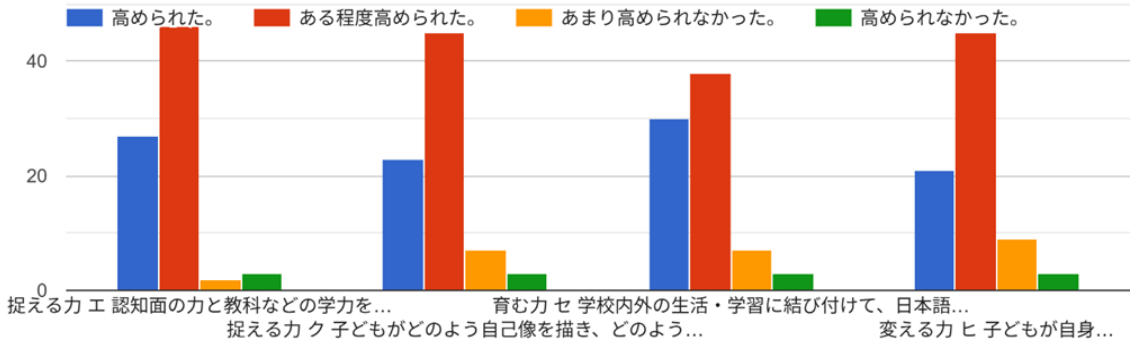
①参加者の背景（立場）



②満足度「参考になったか」



③めあてとした資質・能力の向上について



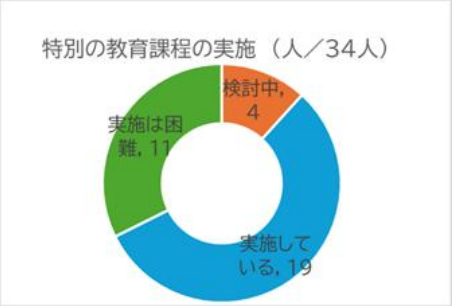
④寄せられた参加者の声（自由記述回答より）

・日本語学習が生徒たちの生きた日本語につながるもので、自己実現の手段になるような授業を考えなくてはいけないといつも考えていたので、生徒の経験や良さ強みなどの自己資源を生かした他者や社会との関わりをもつ言語活動を通して言葉の力を高めていくことが必要であるということを改めて認識できた。
・日本語支援を始めて間もないため、授業内容や学習者の日本語の上達ばかりに目が向いてしまう。本研修に参加し日本語支援員としての取り組み方を認識させられた。単なる日本語指導の場にならないよう今後の学習者との向き合い方が非常に参考になった。
・学習デザインにおいて、学習環境の４要素から捉える視点が興味深いと思った。資質・能力ベース、主体性の重視、経験をもとにした新しい価値の創造など、日本語指導に限らず求められているところかと思うが、それをいかに外国人児童生徒等の多様性や力を生かした形で特別の教育課程でも実現していくのか「活動」をもとに検討することができ参考になった。ブレイクアウトルームでさまざまな立場の方と交流でき、交流の話題も明確であったので、有意義な時間となった。
・タスクベースの言語指導について、自分の中で感覚的になっていた部分がとても明確になった。また、事例報告では、活動の目的が生徒たちの現在だけではなく将来の生活にもつながるように設定されていたり、生徒の経験を活かした活動を設定されていたりと具体的に知ることができた。今後の自分の指導でも実践したい。

・事例報告が特に参考になった。講義や最後の話し合いのテーマが生徒の経験や強みを生かす指導展開ということだったので、従来の日本語そのものを教えることはできないのかと不安に思った。しかし、事例報告では少人数で日本語を教えているということだったので、そういう授業をやってもいいのだと少し安心した。そして、１年次、２年次、３年次の目標は参考になった。日本語の授業で外部からの支援者が多くうらやましい。
・参考になったのは、教師の資質をはっきりと言語化し、具体例も示してくれたこと。ただ、これまでの実践はどうだったのか、今後自分の実践でどのように具現化できるか、自分一人ではなかなか客観的な振り返りも、今後の計画も立てにくいと感じている。国語科としての授業づくりは、いろいろ相談しながら行えているが、日本語の指導は相談できる環境にない。
・主に総合的な学習の時間において、まずは現在の社会情勢を知識として提供することで生徒の体験や経験が強化、更新されるように仕組みたい。そこから、課題解決のプロセスを言語化したり、他者と関わりをもつための表現を学習したりして、それらを活用して協働学習に参加できるようにしたい。担任と連携して、個別指導の時間と学級で参加する時間とを調整し、学んだことを発揮できるように取り組みたいと思った。
・ブレイクアウトルームで地域と生徒をつなぐ「架け橋」が日本語担当者だというお話があり、生徒自身が将来「架け橋」になることは意識していたが、その礎となるものは私との学習で作るんだなと自分の仕事に対して認識を改めた。母語や母文化、生徒自身の関心などを深めるだけでなく外への発信の機会を考えていこうと思った

⑤「特別の教育課程」の実施について（高等学校所属 43 人中）

「特別の教育課程」を実施：19 人
「検討中」　　：11 人
実施は「難しい」　　：4 人



＜現状について＞

<u>実施しているとの回答から</u>

・R5 年度に校内検討委員会発足、R6 年度教育課程作成、調整、校内組織立ち上げ、今年の 4 月から導入実施。

・１，２年生対象に各学年に週２回、１コマ実施。定期テストもあり、単位もつくため、計画的な積み重ねの授業ができる。（３年生は放課後自由参加の日本語クラス）
一方で、キャリア形成を考えると、卒業後は日本語学校のようなビジネス系専門学校に進む生徒やバイトに収まる生徒がほとんど。高校での日本語学習はどこまで必要なのかと悩む。生徒個人の目標によるところも大きい。
また、母国での教育と日本の教育の違いから、少しでも学習につながるようにするには、高校においても一から勉強方法を教える必要があるのではないかと思い、発問と板書とノート指導に取り組んでいる。

<u>「検討中」との回答から</u>

・学校設定科目として「日本語」は設けているが、十分ではなく、「特別の教育課程」による日本語指導として増単してほしい。しかし、カリキュラム変更にもかかわり、また全日制普通科なので制約が多い。現在検討しようとしているようだが...

実施は「難しい」との回答から

・本来「特別の教育課程」にすべき授業を実施しているが、長年継続してきていること、人数が多くて書類の作成等の手間が増えると感じてしまっていること、放課後に「特別の教育課程」を設けるか検討し始めていること（組織や仕組みの見直し・検討中であること）などから、現時点では「特別の教育課程」にはしていない。

・「特別の教育課程」は導入していない。一般コースとは別に、日本語学習コース(日本語の授業が各学年４単位設定されている)を開設している。日本語指導が必要と認められる生徒は日本語学習コースにて学習している。日本語学習コースの特徴は、日本語の授業、さらに、国語科、数学科、理科、地歴公民科の授業は、一般コースとは別に少人数・やさしい日本語で行われている。

＜企画・実施者の所感＞

アンケートでは、満足度も、資質・能力の向上についても高評価であった。学び手は能動的に物的・社会的環境と相互作用しながら学ぶという学習観にもとづく「学習環境デザイン」の考え方で事例を紹介し、話し合いの場を設けたことは、企画者としてもチャレンジであったので大変うれしく感じている。さらに、グループワークの交流について、情報を得られた、新たな考え方に出会えた、エネルギーをもらった等の感想もあった。オンラインで一時的に参集するメンバーではあるが、目標を共有するコミュニティ的な色彩も帯びていたように感じ、オンラインでのワークショップ活動の可能性も感じられた。

また、青梅総合高等学校での取り組みの報告により、制度・システムや受入れ指導体制や、実施している日本語指導・教育支援に関する詳細な情報を得られた。そのため、高校教育の仕組みの中で、多様な言語的文化的背景をもつ生徒の「経験や力を活かし」て、協働で探究・創造活動をどうデザインするかについて、自身の現場と生徒の実態に鑑みて検討し、この研修での気づきや学びを、今後どう活かしていくかまで、具体的に提案くださる方も少なくなかった。

「特別の教育課程」の実施状況に関し、具体的に情報を提供くださった方も多く、学校による日本語指導の実施に対する認識・状況の違いや困難に関し、参考にさせていただいた。最後に、取り組みを報告くださった永田先生、そして参加者の皆さんに、改めて感謝申し上げる。

４　資料（URL にアクセスすれば、ダウンロードできます）

①趣旨・講義資料／グループワーク課題提示　齋藤ひろみ　東京学芸大学

②報告資料　永田明久　東京都立青梅総合高等学校

Ⅱ　研修 B「幼・小・中・高の学びの連続性を保障することばの教育」

＜ねらい＞

多様な言語的文化的背景をもつ子どものことばの教育では、心身の成長発達や子どもたちを取り巻く環境をふまえながら、来日初期から子どもたちが自分らしく、もてる力を十全に伸ばしながら成長するための教育を実現することが重要である。本研修では、幼・小・中・高の各教育段階で子どもの発達の状況に応じて教育内容・方法を探るとともに、長期的な視点で校種間の学びの連続性を保障する教育・支援について考える。学校でのスムーズな受け入れとその体制づくり、文化的な適応や地域支援との関わり、そして、初期段階のコミュニケーションから教科学習、そして自己実現のための日本語の力の育成を目指す日本語指導について、考え方を知り、教育現場の実践事例を通じて理解を深める。さらに、ワークショップ型の活動を通して、明日からの指導・支援に生かせるようアイディアを具体化する。内容は、初めて日本語指導を担当することになった教師や支援活動を始めた支援者を主な参加者として構成してある。

なお、参加にあたっては、本ユニットが作成した動画（参加者限定公開）の事前視聴による事前学習を求める。

1　研修 B 報告

(1)第1回研修　概要

日時	2025 年 6 月 8 日（日）13：30 - 16：00
主たる受講者（対象）	「今年、初めて」、「まだ、経験は数年」という日本語指導・支援に携わる学校教員・支援員・支援者の方
テーマ	「子どもの持てる力と経験を新たな学びにつなぐ～初期支援と活動のアイデア～」
ねらいとする資質・能力※	＜捉える力＞ ア　子どものシグナルを見逃さず、文化間移動と発達の視点をもってその困難さを理解することができる。 ＜育む力＞ ケ　外国人児童生徒等の受け入れ体制・指導体制に応じて、指導・支援を行うことができる。 コ　第二言語習得や教育方法に関する知識を踏まえ、子どもの年齢的な発達の違いを考慮した日本語や教科の指導・支援をすることができる。 ＜つなぐ力＞ テ　外国人児童生徒等教育を学校の教育課題に位置づけ、学校全体で取り組むよう働きかけることができる。
研修内容	１　講義で、外国人児童生徒等の受入れ体制づくりと初期段階の日本語指導・学習支援について学ぶ。 ２　事例報告（豊橋市の初期支援コース「みらい西」の日本語指導）から、受入れ時に考慮すべき点や日本語指導の具体について学ぶ。 ３　グループワーク「あ～さ行の文字でできる語彙集め」を通じて、文字学習と語彙学習、年齢的な発達への配慮について考える。

事前学習課題（参加に当たって）	次の研修用動画の視聴 東京学芸大学先端教育人材育成推進機構外国人児童生徒教育推進ユニット（2025）『初めて教える人のための　田中先生と学ぶ子どもの日本語指導』 講座１　外国人児童生徒の受入とその体制 パート４「国・地方自治体の方針・制度・受入体制（国レベル）」 講座２　学びをつなぐ 就学前・小・中・高等学校における指導・支援 パート１「日本語指導・学習支援の仕組み」 パート２　「日本語指導・学習支援の仕組み～バネッサさんの時間割」 パート４「文化間移動をする子どもの学び～ライフコースの視点」
	講座３　子どもたちの日本語教育 パート２「子どもたちの日本語教育～具体的な内容５つのプログラムについて」 パート４「子どもたちの日本語教育～年齢による学び方・教え方の違い」

※文部科学省
「外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修モデルプログラム開発事業」の「豆の木モデル」（日本語教育学会 2019）にもとづく

（2）研修Ｂ 第１回　実施計画

活動展開	具体的な内容・活動	利用した資料等
①説明「研修テーマ、趣旨、目標」	・本研修の趣旨 ・ねらいとする資質・能力 ・研修終了後の振り返りの実施	研修趣旨のスライド資料 齋藤（2011）／齋藤（2013）／齋藤（2022）
②講義「来日直後の受入れ体制と初期日本語支援」 １．概要	・「日本語指導が必要な児童生徒」とは ・子どもの日本語教育に関する施策等 ・受け入れにあたって (1)事前面談上の注意 (2)関わる人々の連携と工夫	講師作成スライド 参考文献； 文部科学省(2024)／文化庁(2019)／文部科学省「かすたねっと」(n.d.)／かながわ国際交流財団（2022）／文部科学省（2019）
２．学びの連続性 ～子どもたちの学びをつなぐ～	・「接続期」とは？ ・プレスクールの実践 ・生活的概念から科学的概念へ ・ライフコースの視点	参考文献； 内田(2021)／坪井(2023)／ヴィゴツキー（2001）／本山(2019)
３．ことばのコース設計	・年齢的な発達に配慮したコース設計の必要性 ・日本語プログラム	参考文献； 中島（2016）／文部科学省(2019)／本ユニット（2023）「高等学校の日本語指導・学習支援のためのガイドライン」／齋藤（2011）
③事例報告 日本語初期段階の学習支援	報告：「学びの連続性」と「自分らしく」～小学生と中学生が一	講師作成スライド 参考資料； 豊橋市教育委員会 他

	緒に学ぶ『みらい西』の事例より～ 豊橋市立羽田中学校、豊橋市教育委員会初期支援「みらい西」教諭　坂柳言衣氏 質疑応答： 口頭で・チャットへ書き込みで	
④グループワーク	グループワーク ①全体：作業の説明、個人作業 ②グループ（4人前後）： 個人作業の共有	グループワーク課題 ＜個人作業＞ あ行からか行までの15文字を使って、できるだけたくさんの単語を作ってください。 ＜グループで＞ 各自作った単語を紹介し、その後、小学校低学年向きの単語と中学生向きの単語を選んでください。
⑤振り返り	アンケート記入 ・満足度 ・今後の活用のアイディア ・資質・能力の向上の有無	

参考文献・資料

・内田千春(2021)「就学前教育・保育の視点から教育格差を考える―言語文化的に多様な子どもたちと接続期の支援―」『異文化間教育』54号
・ヴィゴツキー,L.S.／柴田義松（訳）（2001）『新訳版・思考と言語』新読書社
・文部科学省「かすたねっと」https://casta-net.mext.go.jp/
・かながわ国際交流財団(2022) 外国につながる子どもたちの支援のための動画シリーズ「国際教室から学校全体へ」https://www.youtube.com/watch?v=SA5h_xaoTAo
・齋藤ひろみ（2011）「外国人児童生徒のための支援ガイドブック」凡人社
・齋藤ひろみ（2013）「文化館移動をする子どもたちへの日本語教育」『月間国語教育研究』No.490 p17-18
・齋藤ひろみ（2022)「外国人の子どもを取り巻く問題」柘植雅義監修・齋藤ひろみ編著『外国人の子どもへの学習支援』金子書房
・坪井牧子（大垣市プレスクール）(2023)「きらきら教室」とは？ー「つながる」学習と支援をめざしてー」東京学芸大学　先端教育人材育成推進機構　外国人児童生徒教育推進ユニット 令和５年度外国人児童生徒等教育研修 第３回資料
・中島和子（2016)『完全改訂版バイリンガル教育の方法－12歳までに親と教師ができることー』アルク
・本山方子（2019）「自律的な学習への転機」外山紀子・安藤智子・本山方子編『生活のなかの発達－現場主義の発達心理学－』新曜社
・東京学芸大学先端教育人材推進機構 外国人児童生徒教育推進ユニット(2023)『文部科学省委託「高等学校における日本語指導体制整備事業」 高等学校の日本語指導・学習支援のためのガイドライン』
https://kodomonihongo.ugakugei.ac.jp/.assets/M22_koko_nihongo_guideline.pdf

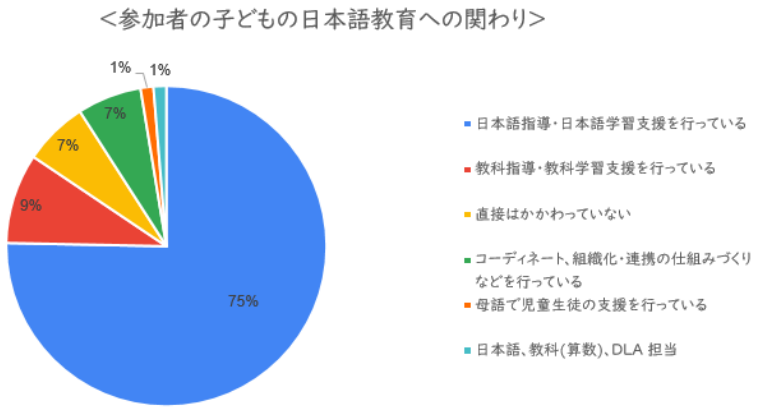
・豊橋市教育委員会 HP「初期支援コース」
http://www.gaikoku.toyohashi.ed.jp/shokishien/mirai_kibou.html
・文化庁「日本語教育の推進に関する法律について」(2019)
https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/shokan_horei/other/suishin_houritsu/pdf/r1418257_01.pdf
・文部科学省(2019)『外国人児童生徒受入れの手引き』(改訂版)
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/002/1304668.htm
・文部科学省(2024)「日本語指導が必要が外国人児童生徒の受入状況に関する調査（令和５年度）結果　https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/31/09/1421569_00006.htm

３　成果

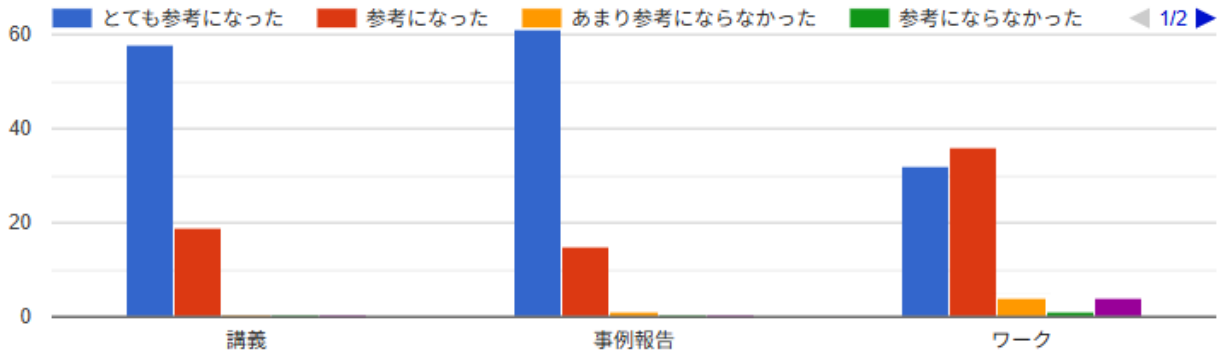
参加申し込み数：128　当日参加者数：112　アンケート協力者数：77（回収率 69.4%）

＜アンケートより＞

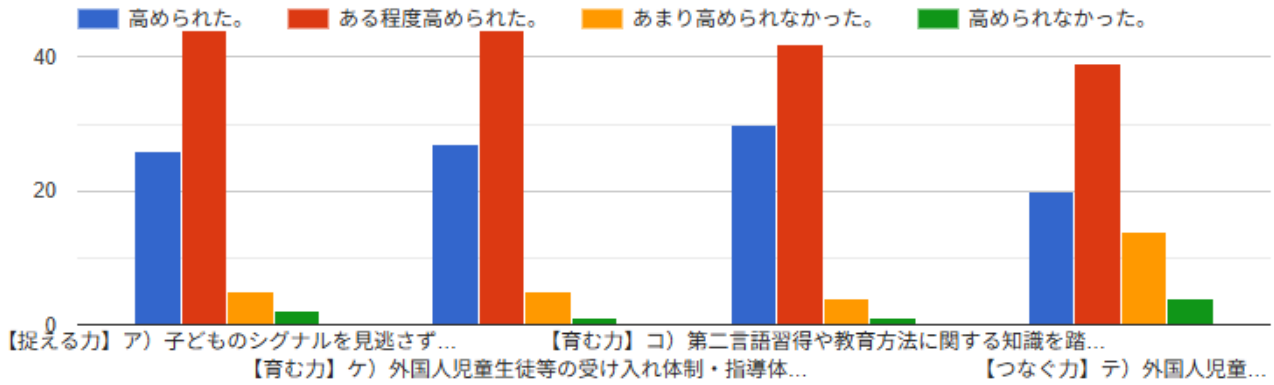
①参加者の背景（立場）



②満足度「参考になったか」



③めあてとした資質・能力の向上について



④寄せられた参加者の声（自由記述回答より）

・講義では、動画の内容を振り返りながらコース設計の方法、生活的概念や科学的概念への学びのつながりがとても参考になりました。実例報告では、初期指導の様子やプログラムなど、初期指導の方法だけでなく、どのような力に結びつくか、実際の授業の流れが参考になりました。ワークでは、異なる意見を聞き、私自身が考えることができない語彙や考えを受けたことで、子供も同じように語彙の幅を広げて、たくさんのことを吸収していくのではないかと思いました。
・初期支援で年齢が違う子供たちに対して指導側が考慮、配慮しなければならないことを具体例を挙げていただき、よくわかりました。また、グループワークを通じて、一つの課題に対しても指導方法についてしっかり向き合うことが必要だということ、それから先生のコメントで、複数で学ぶことのメリット、を改めて感じました。
・初期指導教室の取り組みを教えていただけたのがよかったです。どのような活動をされているかを実際に触れたのは初めてでした。在籍学級とのつながりなど大変参考になりました。
・まず、文化間移動と発達の視点を持って、子どもの困難さを理解し、現場で日本語支援をされている先生方には、その視点をお伝えして、指導のアドバイスができるのではないかと思いました。また、自分が関わっている自治体の受け入れ体制を見直し、初期指導を充実させて、課題を解決していきたいと思いました。さらに、今日学んだことや、みらい西の実例を市全体の教育課題にどう対応できるかを考え、考えられる取組や活動、指導法などを明日から働きかけていきたいと思いました。
・講義＝動画視聴も含めて初期指導の際の留意点を整理できた。 事例報告＝具体例をたくさんご紹介いただき、質疑応答も含めてとても参考になった。「ミッションポッシブル」のような活動もしたことがあるが、これを定期的に行う活動として担任の先生やクラスメートにも知ってもらい協力してもらえるのはとてもいいと思った、ぜひやってみます。

・初期集中指導の具体的な様子について知ることができてよかったです。週に１回の登校日はとても緊張すると思いますが、「なにかを達成する」というミッションがあることで、モチベーションにつながっているのではないでしょうか。そのような配慮がされていることに感銘を受けました。なかなか気づきにくいところですが、細やかな配慮をこれからも続けていきたいと思いました。在籍級へつなげるための確認項目など、参考になりました。
・ご講義の中にも具体的な事例が盛り込まれ参考になりました。実践事例では、初期教室のハウツーを丁寧に教えてくださり在籍校との連携の深め方を見直す機会となりました。最後のワークショップは大変面白く着眼点を整理してくださったことで学びを深めることができました。
・現在はＮＰＯでの支援を行っており今回の事例紹介を具体的に活かすことはあまりないのですが、関わる機会を積極的に作り、その際に参考にしたいと思いました。また、谷先生の「どの段階でも子どもが自分を肯定できる」という言葉をいつも忘れずに活動していこうと思いました。

＜企画・実施者の所感＞

2025 年度研修 B は、昨年度同様、子どもの日本語教育支援が初任～比較的経験の短い方を対象に全３回で企画しました。子どもたちの心身の成長発達をふまえながら、縦と横の学びをつなげることで、子どもたちが自分らしく過ごすための支援の姿勢と具体を、講義・事例報告、参加者同士のワークを通して学んでいきます。

６/８（日）第１回は受け入れと初期支援をテーマとしました。参加者には本ユニット作成の動画を事前視聴してもらい、講義ではそのポイントを振り返りながら、子どもの日本語教育に関する施策を概観した後、受け入れにあたっての注意事項や工夫、成長と概念形成との関係、それらを念頭においたコース設計や教え方の違いを扱いました。続く事例報告は豊橋市の初期支援コース「みらい西」の実践を坂柳先生にご担当頂きました。「みらい西」では小２～中３の子どもたちを特別の教育課程を編成して受け入れています。プログラムの全体像をご紹介頂いた後、小学生・中学生での素材の扱いや教え方の違いを、豊富な写真で具体的に提示していただき、動画や講義がより鮮明に参加者の学びとなりました。また、在籍校登校日に学んだ日本語を使って行う「ミッションポッシブル」や保護者との連絡の取り方も、母語支援が無い現場の参加者にも学びをつなぐ取り組みとして大変参考になるものでした。後半のことばづくりワークでも前半の学びを意識しながら意見交換されていました。活発な質疑からも参加者の熱意と現場の喫緊性が伝わる回となりました。事例報告者の坂柳先生、ご参加いただいた皆さまに感謝申し上げます。

４　資料（URL にアクセスすれば、ダウンロードできます）

①研修 A　趣旨　齋藤ひろみ　東京学芸大学

②講義資料／グループワーク課題提示　谷啓子　東京学芸大学

②報告資料　坂柳言衣　豊橋市立羽田中学校・豊橋市教育委員会初期支援コース「みらい西」